

グローバル化時代のフィリピン革命史研究

——近年の欧米研究者たちの動向——

永野 善子

はじめに

近年、フィリピンでは、19世紀末から20世紀の世紀転換期のフィリピン革命史に関する研究書が陸續と公刊されている。これらの一連の著作にみられる全般的特徴とは、長らくフィリピン独立革命の主たる担い手として位置づけられてきた一般民衆像に再検討を加えながら、社会の中間層もしくはエリート層に焦点をあててその階層の役割や特徴を検討し、より多角的な観点から革命のダイナミズムに接近することをめざすところにある。

フィリピンの歴史学界では、独立国家建設における重要な礎としてフィリピン革命が重要な文化的意味をもってきた。とくに1960年代以降には、フィリピン革命を「未完の革命」として位置づけ、さまざまな議論が展開された。フィリピンでは19世紀末に対スペイン独立革命が勃発したものの、アメリカの軍事的介入により革命政府が瓦解し、新たな宗主国としてアメリカの支配に甘んじることになった。このため、「未完の革命」論では、革命政府を率いたものの、アメリカの軍事的介入に屈服したエリート層は「革命の裏切り者」であり、「革命を持続する民衆」の「敵」として理解されてきた。

他方、この数年間のフィリピン革命史についての新しい研究成果をみると、過去10年余りのフィリピン社会の変化を反映して、従来の「未完の革命」論に代わる新たなパラダイムが模索されている。国際的には、1980年代末に冷戦時代が終結し、1990年代からグローバル化時代が始まる一方、フィリピンでは1986年2月政変を経てマルコス大統領による強権政治の時代が終焉して以降、社会の民主化への道をたどってきた。1980年代には「ASEANのお荷物」とまで呼ばれたフィリピンであったが、2010年代にはグローバル化の波にのって海外出稼ぎや国内のアウトソーシングなどのサービス産業が好調で、高い経済成長率を維持し、中間層も厚くなっている¹。そうしたなかで、「未完の革命」論ではともすれば軽視されてきたエリート層の特徴とその役割に再度関心が向けられ、従来の民衆史観についても再検討が加えられているのである。

本小論では、こうした問題意識のもとで、近年刊行された欧米の研究者たちの著作3点を取り上げ、フィリピンの革命史研究の最近の潮流に接近することにした。以下では、本論に入るまえにフィリピン革命史を概観しておこう²。

1 フィリピン革命史概要

フィリピンでは16世紀半ば以降スペインの植民地支配下に置かれてきたが、19世紀後半になると、スペインの植民地支配に対する批判や抵抗運動がさまざまなかたちで噴出し始めた。なかでも、1896年の独立革命勃発への大きな流れをつくったのは、ゴメス、ブルゴス、サモラの3人のフィリピン人神父が処刑された、1872年の「ゴンブルサ事件」であった。この事件は、スペインの人種差別と圧制を

1 近年のフィリピンの経済成長と社会変化の概説として、井出（2017）を参照。

2 フィリピン革命の全貌についての優れた日本語の研究として、池端（1987）を参照。また、スペイン植民地期の社会経済変化の概略については、永野（1995）、以下の革命史概略については、永野（2016：32～34）、永野（2018：156～158）を参照。

象徴する事件となり、フィリピン各地に衝撃の波紋を広げていった。さらに1882年には、フィリピンの有産知識階層（イルストラード）によるフィリピン統治改革を求める言論運動として、「プロパガンダ運動」（啓蒙改革運動）がフィリピンとスペインで開始された。

しかし、改革要求運動の参加者のなかには、この穏健的な運動に限界をみる人々も生まれた。フィリピンを代表する二つの有名な小説として知られる『ノリ・メ・タンヘレ（われに触れるな）』と『エル・フィリプステリスモ（反逆）』の著者ホセ・リサルもそのひとりであった。リサルは、1892年6月に決死の覚悟でフィリピンへ帰国し、翌7月にはフィリピン人としての民族思想の実践をめざして「フィリピン民族同盟」を結成したが、「同盟」結成後わずか4日後にリサルは反逆罪で逮捕され、ミンダナオ島のダピタンへ流刑された。

リサルの逮捕・流刑をきっかけに「同盟」が解体すると、「同盟」に参加していたアンドレス・ボニファシオが、独立革命をめざした秘密結社カティプーナをその直後に組織した。こうして同年8月にマニラで秘密結社カティプーナが武装蜂起し、対スペイン独立戦争の火蓋が切って落とされた。他方、リサルは1892年から4年ほどの幽閉生活ののち、みずから志願して1896年7月にスペインの従軍医としてキューバに向かった。しかし、マニラでカティプーナが武装蜂起したことによって、リサルは革命扇動者の容疑を受けてスペイン到着と同時にマニラにつれもどされ、1896年12月30日にマニラで処刑された。

リサルの処刑はフィリピン各地の独立革命軍に大きな衝撃となって伝わった。しかし、この頃スペイン軍は本国からの援軍を得て猛反撃を展開し始め、革命軍は各地で苦戦を強いられていった。マニラ周辺諸州を基盤とする革命軍の間では、アンドレス・ボニファシオとエミリオ・アギナルドとの間の主導権争いが激化し、1897年5月にボニファシオがアギナルド勢力によって処刑されるという事件が起きた。その後、独立革命は主導権を掌握したアギナルドを中心として展開し、1898年6月に革命軍が独立宣言をおこなった。さらに、1899年1月にはフィリピンではじめての独立国家としてマロロス共和国が発足し、アギナルドが大統領に就任した。

ところが、この時点で、フィリピン革命をめぐる国際情勢はすでに大きく変化していた。1898年4月に米西戦争が勃発し、アメリカがフィリピンへ軍隊を派遣したからである。アメリカは同年8月にマニラを独力で無血開城し、フィリピン全域を軍政下に置く動きを開始した。さらに、同年12月のパリ講和条約によって、スペインからアメリカにフィリピンの領有権が移譲された。この結果、1899年1月にマロロス共和国を発足させた革命政府軍と国際法上フィリピン領有権を獲得したアメリカ軍が同年2月に激突し、1896年8月に対スペイン独立蜂起として始まったフィリピン革命は、フィリピン・アメリカ戦争へと転化した。以後、軍事的に圧倒的優位を誇るアメリカ軍がフィリピン各地をつぎつぎと制圧し、1902年7月に平定作戦完了を宣言し、アメリカによる統治体制の確立への動きが加速することになったのである。

2 ジム・リチャードソン著『自由の光』（2013年）

このフィリピン革命史をめぐる史料考証をめぐって、今から20年ほど前にアメリカ人の歴史学者とフィリピン人との歴史学者の間で激論が交わされた。ここで取り上げるイギリス人歴史学者ジム・リチャードソンの著書『自由の光：カティプーナに関する史料と研究、1892～1897年』（*The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892-1897*）（Richardson 2013）は、この歴史論争に対してひとつの結論をもたらす役割を果たした重要な著作である。

広く知られるように、この歴史論争とは、1996～98年にフィリピンで「フィリピン革命百年」を祝う行事が続くなかで、アメリカ人の歴史学者グレン・A・メイが、1996年にはアメリカでそして翌年にはフィリピンで『英雄の捏造：没後創られたアンドレス・ボニファシオ像』（*Inventing a Hero The Posthumous Re-Creation of Andres Bonifacio*）（May 1996/1997）を刊行したことによって始まった。同書において、フィリピン革命史研究の重鎮であるテオドロ・アゴンシリョやレイナルド・イレートの研究書を

それらが依拠している史料には信憑性に問題があるという観点から批判したからである。メイによる批判はフィリピン人の歴史学者たちとの大論争に発展し、文字通り、覇権国アメリカと旧植民地フィリピンの歴史学者たちが対峙する、フィリピン革命史をめぐる言説レベルの権力闘争の様相を呈した。しかし、メイの批判はフィリピン人歴史学者たちの実証を覆すことはできず、他方で、フィリピン人の歴史学者の側も史料考証に関してさらなる検証を加えることもなかった（永野 2000、永野 2016：第 2 章）。

この歴史論争からおよそ 15 年後に刊行された『自由の光』は 500 頁を超える大著で、秘密結社カティプーナンの関する未刊行文書を含む膨大な史料（タガログ語）のほとんどを英語に翻訳したうえ、各史料について注釈を加えて、秘密結社カティプーナンの活動を克明に追跡したものである。

本書の序文によると、リチャードソンが本書をまとめるきっかけは、1996 年の「フィリピン革命百年」記念のときに巻き起こった革命史論争にあった。彼は、期せずして、1995 年にスペイン人研究者が秘密結社カティプーナンをテーマとする博士論文をまとめ、同論文からこれまで歴史家が利用してこなかった史料がマドリッド軍事総合公文書館（AGMM）に所蔵されていることを知った。その史料は二つの箱に収められ、量的には膨大なものとはいえないが、高い史料価値をもつものであった。本書では、上記のマドリッドの公文書館に所蔵されていた未刊行文書について詳細かつ綿密な史料考証をおこなっている。

本書に収録された 73 点（そのうち 2 点については複数の版を掲載）のうち 49 点が、秘密結社カティプーナンの代表的指導者であったボニファシオ、もしくはエミリオ・ハシント自身が書いた文書であり、その他はカティプーナンの地方支部の議長あるいは役員が記したものである。したがって、本書に収録された文書からは、カティプーナンの中核的会員や一般会員の証言はほとんど得られていない。また、これらの文書のほとんどはマニラと近隣のカビテ州におけるカティプーナンの活動にかかわるものであり、ブラカン、パンパンガ、ヌエバ・エシハ、ラグナ、タルラック、バタンガスなどルソン島諸州に関する文書もほとんど含まれていない。さらに収録された文書のほとんどは、1896 年と 1897 年の 2 年間の活動に集中しているなどの制約があることも、著者自身によって明記されている（Richardson 2013: xiii-xiv）。

本書では、以上の未刊行文書に加え、すでに多くの研究書でも扱われてきたものの、秘密結社カティプーナンの性格を理解するうえで重要と思われる史料もあえて収録されている。本書は、全 8 章で構成され、計 75 点の史料考証がおこなわれている。すなわち、第 1 章「結社草創期の史料」（2 点）、第 2 章「1892～1895 年」（10 点）、第 3 章「秘密結入会手続きに関する史料」（7 点）、第 4 章「1896 年 1 月～2 月」（7 点）、第 5 章「機関紙『カラヤーアン』」（8 点）、第 6 章「1896 年 3 月～8 月」（15 点）、第 7 章「マニラ中心部とその周辺地区モロン」（15 点）、そして第 8 章「カビテ州：革命期の政治」（11 点）である。さらに本書末尾では、「付録」として 6 点の小論もしくは注記が付されており、本書による新たな史料考証で明らかになった点やアゴンシリョやイレートなどフィリピンの代表的歴史学者たちの議論に対する著者自身の批判的見解が示されている。

序文によれば、本書の史料考証で明確となった事実は、第 1 に、秘密結社カティプーナンは 1892 年 1 月にその結成の準備が開始されており、これは従来の定説より半年早かったこと、第 2 には、アギナルドがカティプーナンに参加したのは本人自身が語ったところによれば 1895 年 3 月であったが、実際には 1896 年 3 月であり、革命が勃発するほんの数カ月前のことであった。さらに、本書に収録された史料が語る結社カティプーナンの性格とは、従来の伝統的な叛乱組織と異なり、正規の規約や規則をもち、評議会や支部などの組織を備えるものであった。カティプーナンは、その核心部において、近代的、かつ未来志向型の合理的かつ世俗的組織であり、社会の特定の階層の人々から共感を得ることを狙うような組織ではなかった。むしろ、自由のための闘いのために、国全体をつなぎ、あらゆる人々（bayan）を動員することをめざした、という（Ibid: xvii）。

本書の最も大きな功績は、1996～98 年の歴史論争において決着がつかなかった史料の信憑性の問題に対して、明快な回答を与えたことにある。本書では、「付録 D」と「付録 E」において、グレン・メイによって疑義が提示されたボニファシオ関係の 2 種類の史料、すなわち、ボニファシオがハシントに

宛てた4通の手紙と、ボニファシオが書いた「タガログ人が知らねばならぬこと」について丁寧な史料考証をおこない、その真偽性にまったく問題がない、との結論を示している (Ibid: Appendix D; Appendix E)。

そのうえで、リチャードソンは、「付録B」として「革命なのか、宗教的経験なのか?」という題目で小論を展開し、秘密結社カティブーナンは、イレートがその著書『キリスト受難詩と革命』(Ileto 1979)で議論したような、「コロルム」と呼ばれる民衆の自然発生的な蜂起形態をもつ伝統的組織ではなく、むしろ、ひとつの民族としてのまとまりをめざした開明的組織であった点を強調する。こうした観点から、リチャードソンは、アゴンシリョ以来イレートにいたるまで、フィリピンの歴史家たちによって展開されてきた「民衆史としてのフィリピン革命論」に真っ向から異議を唱えるのである (Ibid: Appendix B)。

3 グレン・メイ著『更新された過去』(2013年)

アメリカ人歴史研究者グレン・メイによる著書『更新された過去: フィリピン史と歴史叙述』(A Past Updated: Further Essays on Philippine History and Historiography) (May 2013) は、メイがその著書『英雄の捏造』(May 1997)の出版によってフィリピンの歴史学界から総スカンを食らい、一時期フィリピン研究を放棄するという状況にまで追い込まれたと報じられたのちに刊行された論文集である。メイの代表的研究書としては、アメリカ植民地期における行政社会制度変容についての考察 (May 1984)、そしてフィリピン革命期 (1896~98年) とフィリピン・アメリカ戦争期 (1899~1902年) のバタンガス州の政治史についての大著 (May 1991) の二冊があるが、本書には、1998~2011年に学術雑誌や論文集に収録された7篇と2010~11年に執筆された未刊行論文1篇と合わせて、合計8篇の論文やエッセイが収録されている。したがって、本論文集から『英雄の捏造』以後のメイの学術研究の軌跡をたどることができる。

本論文集は、第1部「歴史叙述」(1章)、第2部「フィリピン革命」(2章)、第3部「フィリピンとアメリカの関係性」(4章)、そして第4部「あとがき」で構成されており、著者がこれまで扱ってきたフィリピン革命期からフィリピン・アメリカ戦争期の世紀転換期の時期を中心としながら、8篇の論文とエッセイが対象とした時期はスペイン植民地時代から現代に及んでいる。なかでも興味を引く論文は、第2部第2章「カビテ州の難民: 1896年フィリピン革命の市民戦争」、同第3章「会議における衝突: ボニファシオ、アギナルド、そして対スペイン・フィリピン革命」、そして第3部第4章「フィリピン・アメリカ戦争は「全面戦争」だったのか?」の3篇である。

第2章「カビテ州の難民: 1896年フィリピン革命の市民戦争」では、フィリピン革命期初期における革命軍とスペイン軍との戦闘状況との関連で発生したカビテ州における難民とその後の食糧難や衛生状態の悪化による死亡率の上昇などについて検討している。それによると、フィリピン革命勃発直後の1896年10月から1897年2月には、革命軍の支配下に置かれたカビテ州北方のイムス町には、同州の他の諸町やマニラから多くの人々が革命軍とスペイン軍との戦闘を逃れて移住した。さらに1897年2月になると、カビテ州北方に位置する諸町で革命軍とスペイン軍が交戦し、1897年3月中旬にはこれらの地域をスペイン軍が奪還した。このため、北部地方から南部に移動する大量の難民が発生し、多くの難民が流入した地域では1897年4月までに食糧不足が顕著となったが、1897年5月末にカビテ州での戦闘が終息し、多くの難民は故郷に帰還した。しかし、長引く内戦状態のなかでカビテ州の社会経済状況のみならず衛生状態が悪化し、カビテ州の北部と南部に位置する6つの町では1897年6~8月に赤痢、麻疹、天然痘などによる死亡者が増加した。1897年末になると治安の回復とともに死亡者数も一時減少したが、1898年5月からアメリカ軍の介入により、カビテ州は再度、内戦状態に陥ることになった (May 2013: Chapter 2)。

第3章「会議における衝突: ボニファシオ、アギナルド、そして対スペイン・フィリピン革命」は、フィリピン革命におけるボニファシオとアギナルドの間の確執を取り上げている。ボニファシオは、秘

密結社カティプーナンの代表的指導者として 1896 年 8 月にマニラで武装蜂起を実行した人物であり、他方、アギナルドはカビテ州の革命組織をまとめつつ、1897 年 3 月にはボニファシオに代わって革命軍を率いる地位を獲得していった。この 2 人の指導者の確執は、1897 年 5 月に革命軍によるボニファシオの粛清という結末を迎えた。多くの研究者はこれまでこの 2 人の間の確執を、マニラとカビテ州の地域間の格差、2 人の間の個性の違い、あるいは階級の差から説明してきた。

ところが、本章では従来の研究とは異なり、ボニファシオとアギナルドの対立を対スペイン戦争に対する戦術上の差異、すなわち、ボニファシオの場合には意思決定過程において仲間との協議を重要視していたのに対し、アギナルドの場合にはトップダウン方式をとり、軍事組織の中央集権化をはかったことに注目する。ボニファシオが率いる組織は、その統率力において脆弱性が露呈し、マニラでスペイン軍との戦闘を重ねるに従って次第に不利な立場に追い込まれるようになっていった。ところが、カビテ州では 1896 年 9 月末までにスペイン軍をほぼ撃退することに成功し、同年 10 月にアギナルドはスペインに対する全面戦争を全国に呼び掛け、新しい軍事組織と政府の構築をめざすための声明を出すに及んだ。メイによると、現存する史料では、このようなアギナルドの声明を革命運動に参加した人々が当時のように受け取ったかは明らかではないが、ボニファシオとアギナルドの間で革命軍の組織方法において考え方に大きな隔たりがあったことを示すものである、という (Ibid.: Chapter 3)。

第 4 章「フィリピン・アメリカ戦争は「全面戦争」だったのか？」では、1898 年 12 月にアメリカとスペインの間でパリ講和条約が締結され、国際法上、フィリピンの領有権がアメリカに移譲されたあと、フィリピン革命政府軍とアメリカ軍との間で展開されたフィリピン・アメリカ戦争 (1899 年 2 月～1902 年 4 月) とは、実際、どのような戦争であったのかを検証した試みである。メイによれば、この戦争のために総数では 10 万人以上の米軍兵士がフィリピンに送り込まれ、もっとも多いときには約 7 万人が駐留し、最終的には 4200 人ほどが命を落とした。他方、フィリピン革命軍兵士は 2 万人ほどが死亡し、多数の民間人が犠牲者となった³。

この戦争は、その展開形態から、2 つの時期に分けることができる。第 1 期が、1899 年 2 月から同年 11 月まで、ルソン島北部に終結していた革命軍とアメリカ軍が戦闘を交えた時期、ついで第 2 期が 1899 年 11 月以降で、革命軍はもはやアギナルドの統率のもとでは戦えない状態となり、アメリカ軍が各地でゲリラ化した革命軍を制圧する作戦を展開した時期である。この間に住宅や教会・公共施設が崩壊したばかりでなく、農地が荒れ果て、家畜も犠牲となった。アメリカ軍はさまざまな地域で一般市民を犠牲にしたうえで「強制収容地帯」を設けてゲリラ化した革命軍を制圧したからである。こうして、ほぼフィリピン全土を巻き込んだ 3 年以上にわたるこの戦争については、これまで「全面戦争」(total war) としての理解が定着してきた。しかし、メイによれば、フィリピン・アメリカ戦争とは、「正当な意味での戦争 real war」ではなく、強大なアメリカ軍に抵抗したフィリピン人による「叛乱」(insurrection) である。とすると、この戦争は、むしろ「植民地戦争」(colonial war) として位置づける方が適切となる (Ibid.: Chapter 4)。

4 マイケル・クリネイン著

『19 世紀後半フィリピンにおける謀略のアリーナと叛乱』(2014 年)

ここで扱うマイケル・クリネインは上述のグレン・メイと同世代のアメリカ人の歴史研究者である。その主要著書にアメリカ植民地初期のフィリピン人エリート層をめぐる政治史 (Cullinane 2003) があり、ウィスコンシン州立大学東南アジア研究センターにおいて、アルフレッド・W・マッコイやダニエル・F・ダッパーズらとともにアメリカにおけるフィリピン地域研究を率いてきた。『19 世紀後半フィリピンにおける謀略のアリーナと叛乱：セブにおける 1898 年 4 月蜂起の事例』(Arenas of Conspiracy and Rebellion in the Late Nineteenth-Century Philippines: The Case of the April 1898 Uprising in Cebu)

3 一般に、フィリピン人の死者は 20 万人程度と推計されているが、当時の人口 700 万人の 1 割にも及んだという推計すらある、という (Gates 1984: 367)。

(Cullinane 2014) は全文約 200 頁、本文 100 頁弱の小著ではあるが、1970 年代に長期にわたってセブ市に滞在した著者の経験にもとづき、フィリピン革命勃発時のセブ市の歴史状況を叙述することによって、これまでともすればマニラとマニラ周辺の出来事を中心として語られてきたフィリピン革命史に新たな視座を提供することをめざしたものである。

その特徴のひとつは、巻末に付された付録「セブの 1898 年叛乱者たちの略歴」で、これは 1898 年 4 月蜂起に関わったセブ市とその周辺の 6 つの町 (municipality) の合計 234 人の 40 頁にもわたるリストである。このリストは、セブ市住民 (132 人)、その周辺のサンニコラス町住民 (90 人) とその他周辺諸町住民で構成され、各住民の生年と出生地、学歴、職業、社会的地位、親族関係などを当時の諸史料に拠りながら、簡潔に整理し列記している。本書では、上記の詳細な史料検証にもとづき、1890 年代のセブ市とその周辺諸町の社会情勢を確認し (第 1 章)、1898 年 4 月のセブ蜂起 (“ang kagubut sa Sugbu”) とは何かを明らかにする (第 2 章)。そのうえで、同蜂起に関わった「反逆者たち」 (“mga manggugubut”) とはどのような人々なのか検討し (第 3、4 章)、ついで、なぜ彼らが蜂起したのかを、スペイン植民地支配下のフィリピンにおける行政組織の全体状況とセブ市周辺の地方的状況の双方から分析し (第 5、6 章)、最後に、結論として 1898 年 4 月蜂起の歴史的位置づけをおこなっている。

このような手法で本書を構成した著者クリネインの意図は、その序論にあるように、フィリピン革命という大いなる歴史的事件には、長らくフィリピンの歴史家たちによって展開されてきた「民衆史としてのフィリピン革命論」では語りつくせない諸相があり、それをセブ市の蜂起を事例として、フィリピン社会史の全体状況のなかで議論し、フィリピン革命史研究に新潮流をもたらすことにある (Ibid.: Introduction)。この意味で、本書は、本稿第 2 節で紹介したリチャードソンの著書と同様に、1996~98 年の歴史論争では未消化に終わったフィリピン革命の歴史的性格に関わる問題に対するクリネイン自身の回答とみることができよう。以下、各章ごとに本書の内容をまとめることにしたい。

第 1 章「叛乱の背景：1890 年代のセブ」では、19 世紀後半における経済発展のもとで、セブ市とその周辺の 6 つの町が「ひとつの経済圏」としてまとまりをもつようになったことに注目し、これを「拡大セブ市」として位置づけ、この地域の都市化の進展のなかで、その人口構成における職業分布に着目する。1900 年の統計によると、セブ市では、人口約 6700 人の 18 パーセントが一般労働者 (jornaleros) とされていたが、都市化された地域の就業者 (empleados) は 14 パーセントに達していた。他方、その頃、周辺 6 町の人口も合計 4900 人ほどになり、そのうちの約 35 パーセントが町の中心部に居住するようになっていた (Ibid.: Chapter 1)。

1898 年 4 月の蜂起とは、同年初頭にセブ市の住民およそ 50 人がスペイン政庁への叛乱計画を立て、その後 3 カ月もしないうちに周辺諸町の住民約 200 人が加わり、武装蜂起にいたったものである。第 2 章「1898 年 4 月 3 日：セブ蜂起」では、この蜂起がどのようなものであったのかについて解説する。それによると、1896 年 8 月にマニラで武装蜂起が起きたころ、セブにはそのような状況はまったくなく、平静さを保っていた。しかし、1897 年末になるとセブ市の外国商社で働くマニラ出身の従業員を通して革命の動きが伝わり、翌年に叛乱が立案された。こうして、1898 年 4 月 3 日にセブ市の中心部で蜂起が起こり、3 日間セブ市は叛乱者たちのもとに置かれた。しかし、4 月 8 日にはスペイン軍が同市を奪還したものの、その後、約 1 カ月間、周辺諸町で抵抗が続いたという (Ibid.: Chapter 2)。

第 3 章「セブの反逆者たちを追跡する」と第 4 章「叛乱を起こしたのは誰か? : データの分析」では、叛乱に関わった人々の特徴を浮き彫りにするために、どのような形でデータを収集しそれを解析したのかを明らかにすることによって、その実像に迫ったものである。本章の議論で興味深い点は、対スペイン独立革命よりも、むしろその後続いたフィリピン・アメリカ戦争にいたる時期の方がより多くのセブの住民がひとつの国民として意識を形成し共和国の樹立にむけて努力を注いだと、著者クリネインがみていることにある。このため、本書では、1897 年 12 月から 1898 年 8 月までを、セブ蜂起の第 1 段階として、この間に蜂起に関わった人々のリストを作成し、さまざまな要件を吟味しながら最終的にセブ市とその周辺 6 町の住民 234 人に絞って、その略歴 (教育歴、職歴、エスニシティ、親族・友人関係) が検討されている (Ibid.: Chapter 3)。

その結果、第4章で明らかにされたことは、第1に、234人のうち45人が蜂起にあたって指導的立場にあった人々であるが、そのほとんどが都市部で仕事をもつ就業者（empleados）であり、しかもその半数が市町役場の役職者（principales）が占め、またそのうちの32人が中等教育もしくはそれ以上の教育を受けていたこと。第2に、234人全員について同様の調査をすると、職業についてはほぼ同様の結果が得られ、学歴については、中等教育もしくはそれ以上の教育を受けていた者が131人となり、指導的立場にあった人々よりはその比率が低くなっていたことである。こうしてクリネインは、「1898年4月のセブにおける反スペイン叛乱は、自然発生的な大衆暴動でもなければ、「下からの蜂起」でもなかった」（Ibid.: 34）、との結論を見出すのである（Ibid.: Chapter 4）。

それでは、なぜ彼らは蜂起したのだろうか。この疑問に答えたのが、第5章「なぜ彼らは叛乱を起こしたのか？：植民地全体からの考察」と第6章「なぜ彼らは叛乱を起こしたのか？：地域からの考察」である。

それによると、セブ市とその周辺諸町の都市化された地域の就業者（empleados）と町役場の役職者（principales）が1890年代に叛乱を起こした全体的状況として、19世紀後半におけるこの地域の経済発展と行政制度の拡大によって、「小ブルジョワジー」とも呼ぶべき、経済的に豊かになった地元のエリート層（municipal elites）が台頭したことが挙げられる。彼らは、地域の高等学校にかよい、さらにマニラで大学教育を受ける者もいた。しかし、セブ市を中心とした行政制度の改革によって、州レベルもしくはマニラからより身分の高い行政官が同市に送り込まれることになったため、同地域で台頭した地元の中間層を満足させるものではなかった。1893年に実施されたマウラ法は、町行政の自治を回復することを意図したが、実際には同地域の外からやってきた行政官を利するものであった（Ibid.: Chapter 5）⁴。

こうして1890年にセブ市の行政制度の統合の象徴として、セブ市議会（Ayuntamiento de Cebu）が誕生すると、同市議会は地方権力と富の象徴となった。セブ市とその周辺諸町の地元出身の市町役場の役職者の多くは、同市議会役員と認定されなかったため、地元で従来と同様の権力を行使することはできなくなった。この結果、地元のエリート層の間では従来にも増してスペイン政庁に対する不満が高まり、ついに1896年に叛乱を計画するにいたったという（Ibid.: Chapter 6）。

クリネインは以上のように議論したあと、結論として、セブ市と周辺諸町における1896年の蜂起は、都市部で仕事をもつ就業者（empleados）と市町役場の役職者（principales）から成る地方エリート層が起こしたものであり、一般大衆との連帯によるものではない、とする。さらに本書で扱った事例は、ひとつの地方の出来事であるが、より広くはマニラと周辺諸州で展開された秘密結社カティプーナ（1892～96年）の活動の性格づけについても一定の意義を与えるものとするのである（Ibid.: Conclusion）。

むすび

本稿は、近年の欧米研究者によるフィリピン革命史に関わる著書3点を検討し、どのような新しい議論が展開されているのかを検討する試みであった。その結果、グレイ・メイの研究では、ボニファシオとアギナルドの間の確執は、対スペイン戦争に対する戦術上の先から生まれたもので、従来、議論されてきたようなマニラとカピテ州の地域間の格差や二人の間の階級的差から生まれたものでない、との主張がなされた。他方、マイケル・クリネインの研究では、セブ蜂起に関わった人々は地元の町レベルの中間エリート層であり、彼らを蜂起に駆り立てたものは、州レベルもしくはマニラからやってきた行政官に対する不満であった。また、ジム・リチャードソンは、未刊行史料の検討をとおして秘密結社カティプーナは、近代的な未来志向型の合理的組織であるとの見解を提示している。

メイ、クリネイン、リチャードソンの3人ともそれぞれ別の角度からフィリピン革命にアプローチしているが、共通している点は、フィリピン革命における主要な局面における社会の中間層もしくはエリ

4 ス페인植民地期後半の現地官僚制度の変化については、池端（1992）を参照。

ート層の役割に焦点をあて、従来、革命のなかでのエリート層と一般民衆の対立構造に関心が寄せられてきた議論に対して、より多角的な視座を提供することを意図している。

こうした議論が今日のフィリピンで受け入れられるようになってきた背景には、2010年代にグローバル化の波に乗って経済発展し、フィリピン社会が変容してきたことと無関係ではなからう。このような社会情勢を反映して、フィリピン革命のなかに内在した土着的かつ伝統的な要因よりも、合理的かつ先進的な要因にむしろ関心が集まることになったように思われる。キャロル・グラックによるように、歴史がそれぞれの社会でどのように記憶されるかは、その社会自身の歴史的経験に拠るものといえよう(グラック 2019)。ところで、フィリピンでは、2016年に当初の大方の予想に反してドゥテルテ政権が誕生した。この結果、過去数年間のフィリピンの政治情勢をみると、1986年2月政変以降の社会の民主化への道に逆行するかのように、大衆迎合主義的な社会状況がフィリピン社会に蔓延するようになったことは否めない(永野 2019)。とすると、フィリピン革命について今後どのような議論が展開してゆくのだろうか。引き続き関心を向けてゆきたい。

(ながの よしこ 所員 神奈川大人間科学部教授)

〈参考文献〉

- Agoncillo, Teodoro A. (1956/1996) *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Cullinane, Michael (2003) *Ilustrado Politics: Filipino Elite Responses to American Rule, 1898–1908*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Cullinane, Michael (2014) *Arenas of Conspiracy and Rebellion in the Late Nineteenth-Century Philippines: The Case of the April 1898 Uprising in Cebu*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Gates, John M. (1984) “War-related Deaths in the Philippines, 1898–1902,” *Pacific Historical Review*, vol. 53.
- Ileto, Reynaldo C. (1979/1989) *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840–1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press (レイナルド・C・イレート著、清水展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳『キリスト受難詩と革命: 1840～1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局、2005年)。
- May, Glenn Anthony (1984) *Social Engineering in the Philippines: The Aims, Execution, and Impact of American Colonial Policy, 1900–1913*, Quezon City: New Days Publishers [reprint: 1st ed.1980] .
- May, Glenn Anthony (1991) *Battle for Batangas: A Philippine Province at War*, New Haven: Yale University Press.
- May, Glenn Anthony (1996/1997) *Inventing a Hero: The Posthumous Re-Creation of Andres Bonifacio*, Madison: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin and Quezon City: New Day Publishers.
- May, Glenn Anthony (2013) *A Past Updated: Further Essays on Philippine History and Historiography*, Quezon City: New Days Publishers.
- Richardson, Jim (2013) *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892–1897*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 池端雪浦 (1987) 『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房。
- 池端雪浦 (1992) 「フィリピンにおける現地官僚制度の変容: スペイン体制後期を中心として」、石井米雄・辛島昇・和田久徳編著『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会。
- 井出穰治 (2017) 『フィリピン: 急成長する若き「大国」』中公新書。
- グラック、キャロル (2019) 『戦争の記憶: コロンビア大学特別講義——学生との対話』講談社現代新書。
- 永野善子 (1995) 「歴史的背景」、綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいフィリピン 第2版』弘文堂。
- 永野善子 (2000) 『歴史と英雄: フィリピン革命百年とポストコロニアル』(神奈川大学評論ブックレット 11) 御茶の水書房。
- 永野善子 (2013) 「抵抗の歴史としての反米ナショナリズム: レナト・コンスタンティーノを読む」、永野善子編著『植民地近代性の国際比較: アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』御茶の水書房。
- 永野善子 (2016) 『日本／フィリピン歴史対話の試み: グローバル化時代のなかで』御茶の水書房。
- 永野善子 (2018) 「フィリピン革命史再訪: 近年のフィリピンにおける研究潮流を背景として」、永野善子編著『帝

国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』御茶の水書房。

永野善子（2019）「フィリピン・ドゥテルテ政権のゆくえ：その社会経済的背景と問題点」『神奈川大学アジア・レビュー』第6号。